

大江健三郎初期作品における「弟」の影響

井上 晋

大江健三郎が初期作品で描く舞台、登場人物については大きく「戦時中、農村部で生きる子ども達」、あるいは「戦後、都市部で生きる学生」の二種類に分類することが可能である。私はこれらの作品を読むにあたり、自分自身が大学に入学するまで農村部で暮らしており、閉鎖的な空間での近隣の住民との親しい間柄のなかで育ったこと、大学に入学して以降、開放的な空間のなかでそれまで感じる事の無かった孤独感を感じていたことから、わずかながら感情移入をして読み込むことができた。とりわけ、年の離れた兄と常に行動を共にしていた私にとって『飼育』『芽むしり仔撃ち』で登場する「弟」の兄に対する想いに強く共感できる描写が多くあった。

そこで、本論文を書くにあたり大江健三郎が初期作品で描いた「弟」像に対して、その存在の意義を考察することとする。

まず、『飼育』『芽むしり仔撃ち』における「弟」の人物像について考察していきたい。この二作品では、共通して「僕」の幼い弟がいる。両作品とも「弟」は純粋さを持ち、強い兄弟愛で結ばれている。

しかし、結末において『飼育』では「僕」が草原にいる弟を捜しに行くという形で終了するが、『芽むしり仔撃ち』の「弟」は、既に可愛がっていた犬に疫病の疑いをかけられ仲間たちに殺されたことで、失踪してしまい、その後おそらく死んでしまったであろう描写として、谷の岩の間で「弟」の携帯品袋が落ちているのが見つかる。

そして「僕」は愛する全てのものを失ったことで村からの追放を受け入れることとなる。

こうした作品間における結末部、そしてその状況下における「僕」の心的状況の違いに「弟」の存在の有無が強く影響しているものと考え、以下考察を続けていく。

まず、各作品の「弟」の描写に注目すると、

『芽むしり仔撃ち』

- ・弟が眼をきらきらさせて
- ・弟は夢見るように、うっとりしていった
- ・驚きのあまりに気絶しそうな弱々しきで弟が嘆息した
- ・弟が眼に涙をいっぱいためていった。

『飼育』

- ・弟が夢みるようにいった。
- ・弟は微笑んでいった。

- ・うっとりして弟はいった。
- ・「恐かったか、一人で」と僕は優しくいった。弟は真剣な目をして首を振った。
- ・弟の急に開かれた眼から、みなぎる疲れとおびえが融けていった。

というように、無邪気さや臆病さなど幼い子どもらしさは各作品とも同じような形で表現している。

次に、登場回数を比較するため、それぞれの「弟」が主語として登場する場面を抽出したところ、『芽むしり仔撃ち』は一八九回、『飼育』は六三回となった。ページ数では『芽むしり仔撃ち』が一一四頁、『飼育』が三七頁となっており、『芽むしり仔撃ち』のテキストは『飼育』のおよそ三倍程度の分量と考えると、「弟」の登場回数ほぼ同じと考えられる。しかし、そのなかで、「弟」が単体で主語となる回数は『芽むしり仔撃ち』が一六一回で割合にして八割二分、『飼育』が三三回で割合にして五割二分となり、こうした結果から『芽むしり仔撃ち』の弟は独立した描写が多くあるのに対し、『飼育』の「弟」は他者との依存性が高いものと考えられる。

以上のことを踏まえて、まず『芽むしり仔撃ち』の「弟」について考察すると、本文の

弟が、見られる存在、檻のなかの獣の立場にうまく慣れていないことを意味するものだった。

(二〇二頁)

という表現、また、

あの人殺しの時代、狂気の時代に、僕ら子供たちだけが緊密な連帯を造りあげえる唯一の存在だったのかもしれない。

(二〇五頁)

と語られていることに注目したい。『芽むしり仔撃ち』の「弟」は「僕」の父が「弟」の疎開先を捜しあぐねた結果、感化院の集団疎開に便乗させた。そうした背景の中で、「弟」は水のように柔軟に感化院の仲間と溶け込む。こうした立場の「弟」が、感化院の仲間たちとの連帯を作り上げるということは、その存在意義が「子どもたちだけで監禁された村に暮らす」という設定において、大人たちと暮らす村が舞台である『飼育』と比較しても作品の重要性を占めた人物であると考えら

れる。磯貝英夫氏（※1）は『芽むしり仔撃ち』の作品論にて

全体としていちばんあざやかなのは、主人公の弟である。大江の作品には兄弟の出てくるものが多いが、この弟の可憐さがメルヘンの中心になっている。とくにかれのきじを捕ったときの心の震えは、「少年期の記憶」の甘美なもの典型であろう。

と論じている。大江初期作品に登場する弟を「無垢」の象徴と捉え論を展開した津久井秀一氏（※2）は、「弟」が雉を捕まえる場面について以下のように述べている。

閉ざされた「村」に雪が降り、世界を白一色に覆う時、少年達は「狩り」に興じ、獲物を囲んで「祭り」を行う。少年達が「疫病」や置き去りにされた絶望感を反転させ、純粋に自分達だけの生活を謳歌する作中最も美しい場面だが、この祭りの発端となった「雉」の捕獲者が「弟」であるという事情は、極めて象徴的だ。

感化院の少年達のなかで唯一無二の汚れなき存在の「弟」が自分達だけの、大人が関与しない自由な世界での生活を謳歌する発端として雉を捕獲することで、その世界が、汚れない自由な世界で一層際立たせているということがここから考えられる。そしてこの状況を頂点に、突如として自分の可愛がっていた犬が疫病の疑いにより仲間たちの手で殺されることでその場から駆け去り、後に「弟」の携帯品袋だけが川で発見されることにより死を暗示する結末で作品からフェードアウトしていくこととなる。

次に『飼育』について考察する。津久井氏は、「僕」が弟（＝無垢）との関係性を、自らのアイデンティティーを確保する上で必要不可欠な存在だと考えていると考察している。その根拠となるのが、

明りとりから数かずの眼が兎のようにつりさげられている僕の恥辱を見つめた。それらの眼のなかに弟の濡れて黒い眼があったら、僕は恥じて舌を噛みきっただろう。（一三二頁）

という、「僕」が地下倉で黒人兵の捕虜となり、大人たちがその場に集まっている場面における同氏の、

ここで「僕」が自分が置かれている「恥辱」的状況を絶対に「弟」に見られたくないと考えている点も注目する

必要があるだろう。幽閉されてしまった「恥辱」と死への恐怖、そうしたものを「弟」に見られることによって、これまでの自分と「弟」との関係、すなわち自分と「無垢」との関係が決定的に壊れてしまう。そのことを何より「僕」は避けたいと願っている。（略）つまり「弟」は、「純真さ」「無垢」を喪った「僕」がその存在を保つための最後の砦だということを意味する。

という論である。「弟」についての先述した考察を踏まえると、幼い子どもらしさのある「弟」と「僕」は『飼育』においては常に行動をともにし、『芽むしり仔撃ち』よりも、主体性は薄いものがある。つまり『飼育』の「弟」は「僕」とともに行動をともにすることで「僕」の子どもらしさや純粋さ、また弟を想う兄としてのアイデンティティーを確立するうえでの重要な役割を担っていると考えられる。

以上の考察から、両作品ともに無垢なる存在として登場していることが分かる。その上で『芽むしり仔撃ち』において、「弟」が失踪した後に「僕」が、

僕は弟から見棄てられたのだと考えた。僕が中学校の寄宿舎で上級生を刺し、最初に感化院へ送られた時も、そこを脱走して玩具工場の女工と貧しくて小っぼけな同棲生活をおくっているのを警官と父に見つけられて汚れた服と悪い病気とを持って家に戻った時も、そして再び感化院に収容された時も、弟は僕を見棄てなかったのに、いま彼は僕を見棄てていた。

（二九三頁）

と、「弟に見棄てられた」という表現をしていることから「僕」自身、「弟」に対して依存心が高かったことが見受けられる。この依存心については、『飼育』においても「僕」が「弟」を捜しに行く場面が結末部にあてられている。しかし、この強い依存心さえも「弟」の失踪、そして「弟」の携帯品袋だけが谷底の川にあったという「死」の暗示により『芽むしり仔撃ち』では絶たれてしまう。そして「僕」は村からの追放を受け入れる。

平野謙氏（※3）は『芽むしり仔撃ち』について、それまでの初期作品と比較し以下のように論じている。

ここではそういう人間認識が、勁くしなやかな液体の表面張力のように、いままさにあふれようとする一步手前の微妙な緊張と調和を保っている。というのは、それまでのデスペレートな徒労や絶望を中心とした受け身一方の人間認識が、一つの完結した想像世界の劇的構成

のゆえに、ようやく能動的に転化しようとする兆しをみせている、ということである

大江健三郎の初期作品の多くは最後に徒労感や閉塞感を感じながら作品が終了するという特徴がある。このことを踏まえたとき、平野氏の「受け身一方」から「能動的」な転化という論について、結末部での「自ら追放を受け入れ村を脱走する」という行為が、「能動的」な動きとして当てはまると考える。そしてそれは、『芽むしり仔撃ち』の結末部をそれまでの初期作品とは異なる形態によって迎えたということがいえる。そして、この結末部を作り上げた要因となり得る人物として、死をもって「僕」に絶望感を与えた「弟」の存在が挙げられるだろう。ここに、「弟」の存在が大江初期作品に新しい流れを生み出したことが言えるのではないだろうか。

さらに、ここから『芽むしり仔撃ち』『飼育』以前に発表された戦後を舞台とした作品である『死者の奢り』における一つの場面について考えてみる。この作品の主人公である「僕」は、死体を古い水槽から新しい水槽へ移すアルバイトをしている。そして、「死者」との対話により「僕」は「死者」の世界に足を踏み入れたという考えに陥る。

「死者」の世界に足を踏み入れたと自覚するのは、「僕」が「死者」との対話以降、外に出た際に中年の男を少年と間違え、声をかけて睨まれることが原因となる。その際の描写のなかに、

僕は明るい音にみちた言葉で看護婦や少年に話しかけたいと思いながら、暫く看護婦に並んで歩いた。看護婦は僕に、好意にみちた微笑をむけ、僕はそれに答えるために、微笑みながら少年のギブスをいれた肩に軽く指をふれた。この少年は僕を優しくった兄のようだと考え、長い間静かなもの思いにふけるだろう。

(三二頁)

とあることに注目したい。

ここで「優しくった兄」という立場を、少年を通して回想したのは「僕」自身であり、「死者」との対話により、不動のものとしての「過去」が刹那的ながら「僕」を包み込み、「死

者」と同様に、少年と思わしき生きた人物(＝中年の男)に、希望を持っていた少年時代をともに過ごした弟を仮託させてしまったことで「僕」の躓きは生じたのではないだろうか。つまり、「僕」は、生者にまで死者と同様の仮託を試みてしまったこと、そして過去と死者の世界とに存する不動性に自己の意識を介入させ内向的な思考を育てていったこと、そして結果として中年の男による「憎悪が暗く沈んでいる眼」を認めたことにより、「僕」にとって「死者の世界に足を踏み入れた」という表現に相応しい結果を自ら招いてしまったもの考える。

ここから戦後の作品においても戦時中を生きた兄弟の愛情のようなものが見える。こうした視点からも大江初期作品における「弟」の存在意義が見出せるのではないだろうか。

以上のことから、大江初期作品において「弟」が登場する作品においてその存在は「僕」のアイデンティティーを与えることや、無垢な存在として叙情的に作品を描く上で非常に重要なものであることが分かる。さらに『芽むしり仔撃ち』において言えば、それまで以上に確立されたアイデンティティーを持つ「弟」を登場させ、失踪させることにより、それまででない主人公「僕」の心的状況が生み出され、そのことにより初期作品の終止符を打ったと言われることもあるため、これらの点を踏まえた上でも「弟」の存在は大江初期作品に欠かせないものであることが言えるだろう。

《参考引用文献》

(※1) 磯貝英夫「芽むしり仔撃ち」

(『国文学 解釈と教材の研究』第十六巻 学燈社 昭和四十六年一月号)

(※2) 津久井秀一「「弟」の行方—大江健三郎における「無垢」

(『宇大国語論究』宇都宮大学国語教育学会 平成二十年三月)

(※3) 『芽むしり仔撃ち』大江健三郎著 新潮社 昭和四十五年五月三十一日

(いのうえ すずむ・釧路校4年)